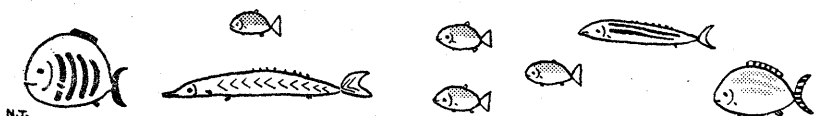


幼稚園における幼児の話しことばの指導



— 中央区立久松幼稚園 —

高 間 富 子

一、実験幼稚園の使命を受けて

中央区立久松幼稚園が東京都から実験幼稚園の指定を受けましたのは昭和二十八年の一学期も終ろうとする頃でありました。

その頃幼稚園は久松小学校の校舎の一部を借りていましたが幼稚園教育に対する一般の関心がようやく高まって来たのと、全焼のため廃校になった千代田浜町小学校の学区まで包含された久松小学校区の膨張から、六組二百六十名の園児をかかえていました。小学校が二十四学級の機構のところ児童数は千三百もあり、いきおい義務教育優先の立場から、いままで使用していた三教室を返さねばならなくなったりして小学校の先生方に懇願して職員室をあけていただいたり、講堂を間仕切っては保育室にあてるなど寄合い世帯や引揚寮みたいに混沌動揺の様相でありました。

父兄はじめ関心をもつ方々はこの窮況見るに忍びずの熱烈な要望、協力が推進されまして、独立園舎建設の相談が日の目を見るようになりました。区関係の有難いお取

計らいと御尽力で浜町川埋立地七十二坪の土地が敷地に決まりました。この限られた土地に六組の園児を取容することはなかなか難問題でありましたが文部省の玉越、池田の両先生や中央区の高橋宮繕係長さん達の非常なお骨折りで変ったケースではあります。小さいながらきれいにまとまった園舎ができるようになったわけであります。

こうした火急匆忙の中にゆるぐ屋台を背負って園児たちの一日の進歩を阻んではならないという考えは始終頭を駆けめぐり心を吐く思いがありました。

和と団結、そうして誠意は、幸いにも事務の方を入れて八名の全職員が、それぞれ責任ある研究分担を忠実に遂行し、園児を帰してから研究調査のため夜おそくまで居残ったことは幾日続いたことでしょうか。その成果が園舎の落成を終えて六ヶ月後の昭和三十年二月三日の研究発表まで漕ぎつけることができたのであります。

二、研究題目

(1)幼稚園の経営 (2)保育全般 (3)幼稚園児の話しことばの指導

A 研究目標設定の理由

(1)幼稚園は六三制の枠外に置かれてい

る。
「幼稚園は義務教育でないから」という観念は、幼稚園経営に大きなブレーキをかけられています。とくに公立の場合施設管轄については、それでなくても豊かでない予算措置などではお話しにならないくらい僅少で小、中学校のおこぼれをいただく程度しかありません。

先生の身分などでも最近運動によって小学校の末席に列ねられましたものの万事控え目で薄氷をふむ不安は去り得ません。

こうした中に父兄や小学校の先生方の差別観がなかったとは子どものひがみからだと断じ得ないものがありました。

幼児の心は白紙のようなものである。それに教育という、一字、一字を染めていく神聖にして生涯を通して人間形成の大きな役割を持っている幼稚園教育がこれであり、この声が大にして叫ばざるを得ません。

(2)幼稚園では家庭のつながりをじかに目標と計画の中に織り込み教育学と児童心理学を基調としてたてて行かねばならない重大な使命があるはずであります。しかも一日の保育の積み重なりがやがて小学校へ進む段階となります。

幼稚園教育は正に学校教育の第一歩であります。幼稚園では小学校のように算数、国語、社会といったように教科としては分けられていないが、園児の生活全般を通して知、徳、体の教育はもとより芸能の分野を含めて未分化のかたちで教育されています。やがて教えられる、知識的なことも、社会性から必然的に陶冶される徳性も、保健衛生の面も、園児の遊びの中に伸されねばならないことです。

それには先生が年度計画に、情案に、そして一日一日の指導案に、実践指導の立場で綿密に計画されねばなりません。

子どもがつねに反省しますことは個性は子どもの成長を阻害するということです。水の流れのように一刻も停滞しない子どもの伸長に先立って、之に応ずる指導案がなければならぬと思えます。

幼児の育成にはかよい草花を育てる以上に綿密な心づかいとたゆまない丹精が必要であります。草花は温度や、水分、施肥の度合ではっきり目立ってくるものであります。幼児の身体や知情意をつつむ心の育ちはこれを一朝一夕に観察できるものではありません。

私ども幼稚園教育にたずさわるものはこの丹精な園丁の心構えと努力がなければならぬと思えます。そして又幼稚園児にとっては土壌に等しい環境の設定は欠くことのできない必須の条件でありましょう。

人の性格は誕生以来絶えざる環境の働きかけによって作られていきます。地理的環境や物的環境の他に心理学的環境がどのように影響するかは人間形成に重大な課題でありまして児童憲章には子どもはよき環境で育てよと教えています。

幼稚園教育で環境設定の上に先生を仲介として園児相互がつくる社会的活動からかもしだされる雰囲気、すなわち心理学的環境が重視されなければならないのは当然であります。

即ち園児の個性を十分に伸し、そのもつ

ている特性を發揮しながら園児相互に調和する社会性を養うことは個性を社会の中に生かし、自己の社会化の中に個性を發揮せしめることでもあります。

人の交りは一対一からはじめられ、一対集団に進み、また集団対一の関係において社会化されていくものであります。

この集団生活自体が幼稚園では各教科を意味し、それが未分化総合のかたちで教育されていくものと解されます。しかしここでは他から注入されるのでなく自分から知ろうとし、学ぼうとする心構えの芽ばえから自主的に成育するものでなければなりません。

(3) 幼稚園児の話しことばは幼稚園教育の中核機能である。

集団生活に欠くことのできないものは「ことば」であります。ことばなくしては指導者は園児の成長の度合いを診断することもできず、知、情、意の発達段階は暗中模索とならざるを得ません。また園児にあっては人のはなしを聞き、自分の意見や欲求を話すことよって生活が安定し、満足感を覚え興味とはげみを催し喜んで他と協

同し同調ができます。

ことばは園児にとっては知識をみがき技能や態度を身につける唯一の媒介者であり、心理学的環境に働きかける触手でありましてことばは幼稚園の保育全般の機能をつかさどる中核であります。

B 研究方法

(1) 職員組織、事務分掌、教科研究部、職員会、PTAの組織運営を小学校と合体し同歩調をとりました。

(2) 施設の共同使用、教育計画を小学校と同調し円滑をはかりました。

(3) 幼稚園児の話しことばの指導には小学校国語部が参加し研究会や実態調査も合流して行いました。

(4) 幼稚園、小学校の授業は相互に参観し研究して幼稚園の研究発表日には小学校の授業も公開しました。

(5) 幼稚園児の話しことばは小学校の一年生とどう結びいているかの題目で研究発表には一年生の担任教諭からも発表しました。

C 幼稚園児の話しことばの指導

幼稚園教育は学校教育の第一歩であります。保育全般は小学校のように教科に分れていないが、各教科の目標を未分化の中に包含しています。園児の遊びと、話しに、そしてあらゆる動作の中に芽生えている各教科のねらう芽をどのようにして培うかの計画が打ち立てられねばなりません。園児の話しことばは知識を広め情操を豊かに、そして高めるため、また望ましい、しつけを身につけたり自己の慾求や感情を表わすために唯一の機能ばかりでなく、園児の心に芽生えつつある成長の度合いを観察し判定する触手となるものであります。

園児の一対一の話しから、一対集団に進み更には集団から一対の関係において社会化されることよって語彙を増し、知、情意が拡充されていきます。人とのつながりはことばよって行われ相互の交りから社会性や共同の精神が養われていきます。

指導の面では従来幼稚園語といわれてきた接頭辞「お」や間合いことばの「ネ」の問題をどう指導するか、文献に照らし実態

を調査して久松幼稚園としての基準を示す必要がありました。語法や文の問題、四才児、五才児の語彙の調査等も現場の教師として握っておく必要があります。

話せない子どもの生い立ちと環境(心的を含む)を調べ話せるようにするにはどうするかは事例研究として細密な観察と指導上の工夫が払われねばなりません。

三、研究経過

一、国立国語研究所々員上甲幹一先生、東京都教育主事打越秀先生、中央区教育主事藤井丈夫、磯野六郎両先生の指導のもとに当園職員の研究部門を定め計画をたてました。

一、接頭辞「お」の問題について指導者としての基準表を作製しこれを小学校の先生方にも理解して貰い協力を求めました。
一、再々父兄会をひらき、又久松校報にも具体的に示し、父兄にも家庭でことばの指導について理解させ協力を求めました。
一、話をきく態度を身につけるため幼稚園できた話の理解度の調査を家庭に求めま

した。

一、話しことばの録音を計画的にとり、これを再生文字化し、問題を見出し研究を進め園児の話しことばの分析は、三十数回録音しその中から関係あるものを文字化しました。

一、研究のため録音した巻数は七十四巻に上っています。

四、研究の成果

一、小学校との関連が軌道に乗った。
一、教育の一貫性、とくに国語科では「話しことば」が幼稚園と小学校が同一方向に指導ができた。

一、ことばを通して躰が身についた。
一、話せない子どもが少なくなってきた。
一、話をするのに、よく考えて話をまとめるようになって来た。
一、一語文で話すことの多い幼児もだんだん文型が整えられて来た。
一、豊かな経験をさせることによって非常に語彙が増して来た。
一、接頭辞「お」の問題は指導者も、園児

も、意識的に話し、不必要な「お」の使用がなくなってきた。

一、父兄の協力の度合が高まって、家庭教育も同調し「ことば」ばかりでなく教育一般に成果をあげた。

一、指導者は人の話を注意してきくようになりことばの分析をして正しい方向づけができるようになって来た。

一、話せない子どもの事例研究と努力によって指導上有効な経験を得た。

一、間あいことば「ネ」の頻度を調査することによって指導上の資料を得た。

一、印刷物「幼稚園児の話しことばの指導」は各方面から参考資料として要望され、すでに五百部以上が出ている。

* * *

(これは去る二月三日、日本橋久松幼稚園の会場にて発表されたものである。)

(日本橋久松幼稚園)

× × ×

× × ×